

# 武蔵野市市民活動推進委員会

## 第3回委員会 議事要旨

日時：平成28年4月26日（火）午後2時から午後5時

場所：武蔵野市役所412会議室

### 1 開会

- －委員長より今回の委員会の内容及び新任の委員のご紹介
- －事務局より手持ち資料確認

### 2 議事

#### （1）市民活動促進基本計画の進捗管理の実施方法について

- －事務局より資料1について説明

#### （質疑・意見交換）

#### ■委員長

- ・基本的な条件として、行政が直接行っている市民活動促進のための事業は計画の範囲に入る。それから民間団体などに行政が委託して行っている事業も入る。大学や企業が、自主的に行政の公的な施策とは関係なく、市民活動活性化に対して行っているものは、この計画の範囲には直接関係ないということで除いている。しかし、市民社協のように、行政とタイアップしながらやっているものについては、行政の政策と連動してやっていると思われるような自主的な事業は含む形になっている。そういう条件のもとにリストアップしたのが資料1の該当する事業である。それぞれ事業を行ったかどうかを時系列的にチェックしていく。
- ・参考指標については、単純に数字が高ければ成果が上がったかとは、直接は言いにくいので、あくまでもこれは参考指標と考えて、成果の評価については、これを踏まえながら考えていくということによいか。

## ■委員

- ・参考指標の考え方としては、その結果によって、市民活動がどのように活性したかという、アウトカムでないと、数字的に評価するのは難しいという課題もあるが、確認のための手法が困難であり、今日は、市及び関係団体が行ったアウトプットを、参考指標として示している。

## ■委員長

- ・今日は評価そのものではなく、評価の項目に使う項について確認を行うので質問・ご意見をいただきたい。
- ・また、評価については7月の委員会で行うという流れでよいか。

## ■事務局

- ・評価は、実施の有無及び実施主体による自己評価を行い、最終的に委員会による評価をする形となる。

## ■副委員長

- ・該当する事業と参考指標の関係について、例えば市民社協が実施している「お父さんお帰りなさいパーティ」という事業について該当する事業に書いてあるが、市民社協の事業に関しての参考指標がないといった関係性やまとめ方はどういうふうになっているのか。

## ■委員

- ・事業自体の指標化は非常に悩ましい部分である。例えばこの事業に何人来たかということになると、その数を増やしていくという方向性だけに、評価が行き過ぎてしまう可能性もある。該当する事業が参考指標に直結することではなく、それぞれ取り組み事例にかかわるものとして該当する事業、取り組み事例にかかわるものとして参考指標ということで、位置づけていると考える。

## ■副委員長

- ・数を増やすことは目的になってはいけないが、数も何かをあらわしているということは

あると思うので、数をあえて押さえない必要もないと思う。

#### ■委員長

- ・押さえない必要がないということは、押えたほうがいい。

#### ■副委員長

- ・押さえておいて、使うかどうかは後で考える。数を集めることだけにきゅうきゅうとするのはよくないが、数はそれはそれで何か物語るのではないか。

#### ■委員

- ・おもしろいものとか楽しいものにはおのずから人が集まってくるので、ある面ではバロメーターとしての要素がある。それに伴って、人は集まったけど、結果的に大した内容ではなかったという場合もあるし、タイトルで集まりやすいというものもあるし、その辺は踏まえる必要はあるが、ただやはり数というのは、ある面では見やすいバロメーターとは言える。
- ・数も重要だが、やはり進捗状況の中でも大事なものはプロセスである。単発的終わってしまう事業もあるが、それを継続的にやった結果、徐々に人が増えて事業が成り立ってきたというような見方もあるので、事業の内容等についても踏まえながら考えるということが必要である。

#### ■委員長

- ・参考指標に載せているのは、市の直営であったり、直接委託であったり、あるいはボラセンであれば、骨格的な、登録数といったものに絞ったということである。
- ・それに対して今のご意見は、一応数がわかるものについては参考として載せておいたほうが、何か議論に役立つのではないかということで理解していいか。

#### ■副委員長

- ・まとめ方もある。どういう活動が受けているとか、それによって支援をどこに重点的にやっていくかということを考えるためには、ただの平均というよりは、最近の傾向、トレンドが大事なポイントだと思う。また、市民社協はあえて載せなかったことや、プ

レイス等の様々な講座を平均化した意図を確認したかった。

■委員長

- ・7月の委員会の段階では、背景である事業の概要を参考資料として提出してもらおうということではよいか。

■副委員長

- ・あとは1事業当たりの平均を指標化した意図、この指標があらわしているものを示してほしい。例えばカテゴリー別に平均を出すことも可能なわけで、でもあえて全て一緒に平均と捉えるというところの考え方がわからなかった。

■委員長

- ・カテゴリーというのは、この参考指標の3番の市民活動促進事業を幾つかのカテゴリーに分けて見てもいいと思うが、全部ひっくるめて1事業当たりとしているので、その辺の意図という意味か。

■副委員長

- ・この参考指標が1事業当たりの参加者数というまとめ方をすることにより見えてくるものは何なのかがよくわからなかった。

■委員長

- ・それでは、こういう質問が7月になったときに出てくる可能性があるので、背景となった情報そのものを参考資料として提示してもらいながら、質問が出たら答えてもらうということではよいか。

■副委員長

- ・参加者数が経過的に増えてきているということがあると思う。そのことの持っている意味というのを問うていく必要がある。

#### ■委員長

- ・これについても事務局から、傾向について説明してもらおうと、わかりやすいと思う。

#### ■委員

- ・例えばヒューマン・ネットワークセンター事業について、どの評価表を見ても該当する事業として記載されている。市民社協は比較的わかりやすいが、そのほかに関しては、一体何の事業なのかがわからなく、どう評価していいかがわからない。

#### ■副委員長

- ・すべてを書かなくてもよいが、例えば講座であれば何回行ったかというようなことが書いてあるとわかりやすいと思う

#### ■委員

- ・事業名称と、当該年度の実施の有無だけでは、わかりづらい。別途資料を提出する必要があると思う。
- ・大きなくりの事業をどこまで細分化していくか。膨大な資料になってしまうとおもわれるので、別途資料の中で整理していくという形で検討していきたい。

#### ■副委員長

- ・市民社協だけが具体的に記載されているなど、バランスが悪い。

#### ■委員

- ・評価表ごとに同じ事業が出てくるということは、施策、施策の目標、あとは取り組み事例に関して、該当する事業の内容だから、同じ事業が出てくるということでよいか。
- ・それぞれの事業が、施策の目標を達成できているかということを理解していくことでよいか。

#### ■委員長

- ・それが現状だとわかりにくいので、それぞれがどういう事業なのか、イメージが湧くような参考資料を添付してもらおうと、わかりやすいと思う。

## ■委員

- ・基本施策の市民活動という言葉が、カテゴリー分けがされていないので、わかりにくいと思う。女性のことがあったり、子どものことがあったり、高齢者のことがあったりというのが、該当する事業にランダムに書かれているので、何に対してどの事業なのかというところもわかりづらいと思う。

## ■委員長

- ・今回のこの評価表の意味というのは、これまで進行してきた計画を中間段階で見直してどれくらい成果が上がってきたかを大枠で捉えるという意味なので、我々なりに、様々な分野がある中で、全体を見たときに、該当する事業は大体こういうものがあって、どれくらいやってきたか。そういう中で評価として考えたときに、大体こういうふうに評価できるのではないかというのを、7月の委員会でやろうかということ。これについてはいろいろやっぱりわかりにくい点なり、抽象的であったり、現在の資料ではわかりにくいところがあるので、それぞれの事業についてイメージが湧くような説明、参考情報を用意してもらい、それを見ながら、大体これまでこれくらい進んできたというのを確認できればいいかと思う。
- ・計画期間の後半をどうするかということを考えて、次の5年間にいい政策をやっていたかということに重要な力点がある。

## ■委員

- ・評価というのは、進捗状況を数字で出すのか。

## ■事務局

- ・例えば、実際裾野としてどう広がっていったのかというのを数値評価するのは、難しい部分がある。どう評価していくかを、委員会のお力を借りながら、考えていきたい。

## ■委員長

- ・指標そのものは参考指標なので、数値評価というよりは、定性評価にならざるを得ないし、むしろそちらのほうがいいのではないかと思う。これからの5年間に対して過去の5年間の成果をどうやって生かしていくかという形になるかと思うので、ある程度定性

的に文章を言葉で評価していく、今後の課題を明確にしていくということだと思う。

#### ■委員

- ・前向きに取り組めるような評価の仕方とかそういう書き方でよいのか。

#### ■委員長

- ・よく教育学では、形成的評価と言うが、形成的評価というのは、切り捨てるための評価ではなくて、将来よくなるために現状を明確に認識するという意味なので、今回もそういう意味で評価をするということよいかと思う。

#### ■副委員長

- ・評価表の2の4、市民活動に関する学びの機会の提供というところで、例えば、むさしのヒューマン・ネットワークセンター事業というのは、様々な事業をやっていると思うが、それは事業として一くくりに書かれていて、プレイスは様々な事業をやっていると思うが、事業が3つしか書かれていない。また市民社協だけが具体的に事業が書かれているという点が、同じ抽象度で記載がされておらず、違和感がある。

#### ■委員長

- ・市民社協の事業がこれだけ細かく記載されているのは、大きなくくりで記載できないからなのか。

#### ■事務局

- ・市民社協の場合、事業数がたくさんあるわけでないという部分もあるが、大きなくりの事業名というのが特にないため、実施した事業名のまま記載している。

#### ■委員長

- ・それぞれの実施主体のくくり方の違いがあるので、致し方なくこういう表現になっているという理解をしながら、実施主体単体でどうということではなく、全体としてどうなったかを見る形でよいのではないか。

## ■副委員長

- ・むさしのヒューマン・ネットワークセンター事業という形でくくって入れたわけだから、市民社協も「市民社協事業」、プレイスも「プレイス事業」でいいと思う。どうしてもそうしなくてはいけないのであれば、注釈でもつけておけばいいと思う。

## ■委員

- ・ヒューマン・ネットワークセンター事業は特にそういった傾向があると思う。ヒューマン・ネットワークセンター事業に関しては、市の事務報告書に記載があるが、講座を行っていたり、図書の貸し出しを行っていたりと複数の事業がある。例えばどういったことをやっているかといったことを加筆して、もう少しわかりやすいよう工夫できるのではないか。

## ■委員長

- ・基本は事業名で記載されており、市民社協は組織名だから、事業レベルで落とすところになったということだと思う。その辺りの理由であったり、あるいは、例えばヒューマン・ネットワークセンター事業については、事業の具体的なイメージを記載したり、参考指標の意味がわかるような参考資料つけるといことで、7月に向けて準備してもらおうということによいか。

## (2) 市民意識調査等の結果について

―事務局より資料2、3、4について説明

### (質疑・意見交換)

## ■委員長

- ・総務省が社会生活基本調査を5年に1度やっていて、ボランティア活動参加率が出ている。それを見ると女性の30代、40代が意外と高い。内容的にはおそらく青少年育成関係、子供会関係、PTA関係等が入ってくるので、若干上がっていると思う。ボランティア活動は定義からいくと、公共性、公益性のためとなるが、実際には当事者性の強い活動が多い。外から見れば公共性、公益性だが、本人の気持ちとしては、自分自身のプライベートな生活や意識とつながりのあるところで参加するというケースが随分ある



のが実態だと思うので、自分自身の事情等とうまく合うところで情報が来たり、機会があると、参加しやすくなると思う。

#### ■副委員長

- ・市民活動というときに、武蔵野市としては、武蔵野市のことについて活動している人だけを考えているのか。国際的なNPO、NGO等も入ってくると思うが、この意識調査では、市民活動ということが狭く捉えられているように思えるがその辺りはどうなのか。

#### ■委員

- ・市民意識調査については、武蔵野市の長期計画、調整計画を策定するうえでの基礎資料という位置づけになっており、特に市民活動に関して行った調査ではない。

#### ■副委員長

- ・市民の市民活動についての意識はどうか、どれぐらいやっているかというのはデータがないのか。
- ・今後、その辺りのデータをとることも考えてもらいたい。

#### ■委員

- ・やはり何か社会に貢献するという気持ちや自分の身近なところで活動を始める、ボランティアがしたいという方がプレイスに来られる。現場としてはそういう方が多いのが実態だと思う。
- ・この意識調査は市民活動に限らないでという調査なので、市民活動の調査とは数字が違ってくると思うが、参考になることが多い。災害については、非常に市民の意識が高いこと、あとは高齢者の方のケアとかも重要であるということが、非常にわかりやすくなっていると思う。

#### ■委員長

- ・家事、仕事が忙しく、参加する時間がないというコメントがあるが、ご経験等から、何か感じることはあるか。

## ■委員

- ・年代ごとによってボランティアの捉え方が違うと思うし、例えば子育て世代で言うと、学校のPTA活動もボランティアと考えたりしているところがあると思う。調査結果から見える現状の問題点で、仕事や家事が忙しく、参加する時間がないと言っているのは、やらなきゃ仕方がないからやるというような意識もあって、現状の問題点という質問に対して、もし書く項目があったとすると、「仕事や家事が忙しく、参加する時間がない」というところに○をつけたくなるという感じだと思う。
- ・ボランティア活動というと、非常に前向きなイメージがあって、自分ができる範囲の中でやろうということをやっているはずだと思うが、意識調査をすると、マイナス的な要素が出てくるのは、問題があると思う。

## ■委員長

- ・ボランティア調査はいろんな形で行われているが、例えば「下記のような内容のボランティア活動に参加したことありますか」と聞いて、選択肢として、「PTAの活動」、「町内会の活動」があると、その人が嫌々参加しているのか、自発的に参加しているのか関係なく、○をつける。自発的にやっているものだけが挙がっているわけではないと思う。
- ・私は、生涯学習問題が専門だが、学習活動に参加しているかどうかで、何で参加しないかと聞くと、圧倒的に出るのは時間がないということだが、ほんとうに忙しいからやっていないのかというと、必ずしもそうではない。お金がない、時間がないというのは、参加しない口実としてちょうどいい項目だというのはあるので、少し割り引いて考えたほうがいいと思う。実際にほんとうに忙しくて参加できない人もいるのは事実だと思う。

## ■委員

- ・やはり自分でやりたいと思うか思わないか。どんな理由があっても、やりたい人はやる。やりたい人というのは、やりたいと思ったらその中で時間を調整するし、お金も調整する。何か役に立ちたいという気持ちが、ボランティアのもとになることだと思う。やる気さえあれば、極端な話、何でもできる。もちろん仕事が忙しいというのはわかるが、この時間ならやれる、今週のこれならやれるというふうに、やりたければ時間をつくって、前向きに取り組んでいけると私は思う。

#### ■委員長

- ・そのとおりだと思うが、多分政策的に大事なものは、厳しくてもやりたい人はやる、幾ら条件を整えてもやらない人はやらない、このボーダーラインをどこまで上げるかということだと思う。その辺りの条件づくりをどうするかが、おそらく政策的には重要になってくると思う。

#### ■委員

- ・データを見ていると、半分ぐらいがコミセンを知らない、来たことのない人というのでており、コミュニティ連絡協議会などでも、50%もいればいいじゃないかという意見と50%じゃ少な過ぎるといふ、対比する意見がある。行政のほうでも「コミセンってなんだ？」というリーフレットをつくっており、新しく武蔵野市に越された方には、いろんな資料と一緒に差し上げようということもやっている。せっかく地域にあるのだから、もう少しみんなに参加してもらおうということ。コミセンは死ぬまで活動ができる居場所だと思っているので、働いている方でも、少しの時間でも、受け入れる側が融通をきかせて、コミセンの中で輝いていただきたい。私たちがボランティアを楽しく生き生きとやっていけば、みんな楽しそうだね、うれしそうだねと入ってくるような気がする。

#### ■委員長

- ・本人の意思が大事だということと、もう一つはやはり、受け入れる側がもっと楽しい条件をつくることも大事。

#### ■委員

- ・受け入れる側も常に人を増やそう、皆さんが喜ぶ事業をやろうという意識を持っていないと、人は集まってこないという意識を持っている。

#### ■委員長

- ・けやきコミセンは子育て中の方も入っているし、男性が最近増えていると聞いたが、その辺りの要因はどういうことだと思うか。

### ■委員

- ・やはりロコミだと思う。10年ぐらい前は、団塊の世代に地域で活動してもらおうということで、声をかけたが、ボランティア活動よりも仕事をしたいという方が多く、なかなか定着しなかった。今は60後半、70代の人もすごく元気なので、アンテナを張りめぐらして、地域に引っ張り出してあげるといふ工夫も必要だと思う。

### ■委員長

- ・学生では、成蹊大学の学生ボランティア本部Uni.（以下Uni.）の人数がすごい。

### ■副委員長

- ・Uni.がどうしてあんなにすごいのかということは、それはそれできちんと考えなきゃいけないことだと思う。最初十何人から始めたのが、今300、400という形で増えている。地域のどこに行ってもUni.さんにお世話になっていますと言ってもらえる。学生が自立的に回りはじめると、とんでもない力を発揮するというのはすごい。
- ・大学の中でも、やりたいけど一歩が踏み出せない子たちのために、ボランティアセンターとして個人でも登録できる制度を作り、メーリングリストなどで、単発のボランティアを紹介したりしているが、私もあのすごさの秘密はわからない。

### ■委員長

- ・なぜ学生がボランティア活動に前向きになるのか。その辺りを今後分析したい。

### ■委員

- ・自分たちが何かをやったときに、それに対しての成果が出てきたり、その結果が結びついたり、その活動をすることで友達ができたり、楽しいことがあったり、そういう相乗効果が出てくる。ですからボランティア活動の中で大事なものは、行って楽しい、やって生きがいみたいなものを感じるということ。これをやることによって、人の助けになっているんだということ、自分の気持ちが入る。

## ■副委員長

- ・人のためにということも大事だが、結局そこで自分がもらうものが多いということはずごく皆さんおっしゃるし、あとはそれが楽しいということをどう伝えていくか。
- ・成蹊大も学内にボランティア支援センター（ボラセン）がある。ボラセンがかかわったもの、登録団体とか、個人とか、そういう人の紹介とか、ボラセンがやっている事業はもちろん報告書の中に書くんですけど、全くボラセンと関係ないものを掘り起こすこともやろうということにしている。全学生に向けて、ボラセンの活動とかかわらず個人でやっているもの、個人で団体に所属して学外でやっているもの、そういうことをボラセンに紹介してほしいとあって、報告書に載せるようにしている。武蔵野市も同じだが、みんなが知ることで、じゃあ私もやってみよう、となっていくと思うので、そこが現状うまくできていないのが、ボラセンの課題である。

## ■委員長

- ・私も職場が大学だが、学生を見ていると、人のためというよりは、自分の勉強のためというのがとても多い。就活に生きるとか。私のところでは、教員養成課程をもっているため、学生にとっては学校でボランティア活動をやるというのが必須になっているので、自分の力をつけるためということが多いし、でもやると、人とのつながりができるし、感謝されて、すごく達成感があるといった相乗効果が出てくる。

## ■委員

- ・やはり年代別にボランティアの考え方はかなり違うと思う。学生さんたちが、自主的に頑張っていけるというのは、やはり時間的な余裕があり、その先の自分の将来のことに関して、やることによってどんどん自分のプラスになっていくということがある。
- ・それを越えて子育てに入っていくと、子供のことやいろんなことで、やはり時間的な制約がいろいろあり、せっぱ詰まっているような状況になってしまう。住みやすさ向上のための活動意向というのは、子どものこともあり、この年代が一番切実にあるにもかかわらず、自分たちが動けない。さらに、社会からはやってくださいと求められるが、できないというジレンマがある。
- ・その後、60代以降になって、子育てが一段落して、落ちつくともた社会のことを考えていける余裕があると思う。だから、この30代、40代、50代というのは、ボラン

ティア参加というところにおいては、少しつらい時期だと思う。そういったことを、ある程度社会が認めてもらいたいというはあるが、上からは求められる、下からも求められるという状況。そのジレンマみたいなものが、意識調査に出てきているんじゃないかと思うので、そこを読み解いてもらいたいという思いがある。

#### ■委員長

- ・行政のほうで、例えば市民活動組織を考えても、やはり年代別にそれぞれアプローチの仕方は違うということになる。
- ・企業のマーケティングと似たようなものがあって、マーケティング・セグメンテーションというか、ターゲットとする層によって働きかけ方が違う。そのあたりが、我々の今後5年間の計画づくりに少し生かされていくといいと思う。

#### ■委員

- ・ボランティアの情報発信ということに関しても、その年代によってボランティアの求め方も違うと思うので、情報の発信の仕方も、内容も違ってくと思う。
- ・そこを同一化ではなくやっていくことによって、5年、10年後よくなっていくと思う。

#### ■委員長

- ・今までの議論のポイントを整理すると、1つは本人の意思が大事であるということ。本人がやる気があれば、乗り越えてやれるということがあるかと思えば、もう一方で、少しやらされている感がある。ボランティア活動という名目で動員をかけられるということもあるので、その辺りは少し考えなければいけない。
- ・受け入れる側とすれば、楽しさをとにかく提供して、楽しく入ってきてもらえるようにする。
- ・口コミで広がっていくという要素が強いので、そのあたりを考えていかなければならない。
- ・学生が一体どういう条件であんなに活性化するのか、その辺はこれからの研究課題になる。
- ・最後に、やはり年代別に条件が違うので、働きかけなどは、年代の特性を考えながら行う必要がある。



### 3 事務連絡

- ・今後の第4回、第5回、第6回の日程について後日調整する。

### 4 閉会

以上